

I 学習指導計画（校内研修計画）

1 研究主題

進んで発表し、考えをつなげる子どもの育成

～「感得」と「発信」の往還を生む授業づくりを通して～

2 研究主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会は情報化やグローバル化が加速度的に進行し、それに伴って人々の価値観や生き方が多様化し、情報があふれ、急激な変化を続けている。このような予測困難な時代において、未来の社会を予見しながら問題を解決していくためには、学校教育で得た知識だけでなく、それ以後に獲得する新たな情報や知識を基盤に、新しい考え方や価値観を生み出すことができる資質・能力が必要とされている。

学習指導要領でも、総則において「様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」が求められ、学習の基盤となる資質・能力として、言語活動、情報活用能力、問題発見・解決能力を挙げている。子どもたち一人ひとりが、生涯にわたって自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる資質・能力を身につけることができるようにするために、情報活用能力の育成を意識した取り組みや授業の改善がより一層求められているといえる。

本校は、平成30年度から四国地区学校図書館研究大会香川大会を受け、学校図書館を効果的に活用することによって、本や人とつながり、さらに学びを高めていこうとする子どもを育ててきた。そして、令和3年度からは三観小研学校給食・栄養部会に向けて、生活リズムの形成をめざし、食に関する学びを通して、課題について自ら考え、よりよい将来の自分に向かって学校での学びを生活場面で実践していこうとする子どもを育てたいと考え、研究を進めてきた。令和4年度県学習状況調査質問紙調査では、「学級では安心して自分の意見を言うことができる」と答えた児童が県平均に比べて8.2ポイント上回っていた。また、「普段の授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しているか」という質問に対して、県平均に比べて19.7ポイント上回っていた。このことから、ICT機器の活用力は、本校の強みの一つと捉えている。その一方で、「学級の友だちのとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができてきている」と答えた児童が県平均に比べて5.1ポイント下回っていた。また、「分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながら、諦めずに取り組んでいる」と答えた児童は県平均に比べて2.7ポイント下回っていた。これらの結果から、本校の児童は、自分の意見をもつことができ、安心して自分の考えを発表することができているその一方で、話し合う活動の中で、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていないと感じている児童が一定数いることが分かる。そこで、本年度は、これまで培ってきた研究を継承発展させ、課題解決に向かってICTを活用する中で、必要な情報を求め、「人・もの・こと」とつながることや、自他の考えやそのよさに触れる活動を通して、見方・考え方を働かせ、自分の考えを深め、さらに学びを高めていこうとする子どもを育てたいと考えた。

3 研究主題について

「進んで発表」とは、主体的に学ぶ姿と捉える。それは、読む・聞く・見る等で感じたことを意欲的に発信する姿である。「学級では安心して自分の意見を言うことができる」と県平均を上回っているが、「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるように資料や文章、話しの組み立てなど工夫している」児童は県平均を下回っている。この結果から、児童がより意欲的に、なおかつ自信をもって発表するには、ただ自分の意見を発表するだけでなく、根拠となる文章や資料などをもとにして、自分の考えを説明することが大切であると考ええる。

「考えをつなげる」とは、深い学びに向かう姿と捉える。それは、課題解決に取り組む中で、個々の考えやよさを交流し、自らの知識や技能を組み合わせたり、新たな価値を創造したりしながら解決を図る学びの姿である。また、それを自覚して次に生かそうとする姿である。この時に大切となるのが「他者」である。ここで言う「他者」とは、お互いに影響し合ったり考えを発信したりする相手のことである。子どもたちは人とつながることで、多様な考えに触れ、自分の考えを確かなものにしたり、再構成することでよりよい考えへと高めたりすることができると考ええる。

以上のような子どもの姿を実現するために、サブテーマを『「感得」と「発信」の往還を生む授業づくりを通して』とし、「感得」と「発信」の往還が生まれる授業の中で、児童が自発的に情報を求め、活用しながら、生涯にわたって主体的・対話的で深い学びを向かうことができる力を育成しようと考えた。本校では「感得」を「感じることを大切にして、情報を取り出し、自分に取り入れること」とし、例えば、読む、聞く、調べる、実験をする、観察する等のインプットする行為を含んだものと捉えている。一方、「発信」とは、「自分の心の中の思いや考え、感情等を表出し、かたちとすること」であり、言葉や絵による表出だけでなく、図や音楽、動作等、多種多様な表現を含んだものと捉えている。この「感得」と「発信」を往還する過程を大切にし、考える力を中核として、単元の中、そして一時間の授業の中で、何度も行き来させていくことで、児童が主体的に感じたことを言いたい、伝えたい、書きたいなど自分の思いや考えを表出することにより、新たな疑問を生み出したり、学びを深めたりすることをねらいとしている。

4 研究内容

(1) 研究の視点

視点1 「感得」と「発信」の往還を生む授業づくり

- ① 「感得」と「発信」の往還を生む単元づくり
- ② 「感得」と「発信」の往還を生む授業づくり

視点2 情報活用の基礎力を育てるサプリの開発

- ① 新聞サプリ・教科書サプリの継続と開発

(2) 研究の構想

<学校教育目標> 志をもち 未来に向かってたくましく生きる子どもの育成

進んで発表し、考えをつなげる子どもの育成

～「感得」と「発信」の往還を生む授業づくりを通して～

<子ども像>

学びを通して
考えを深める子

学びを通して
体力作りをつづける

学びを通して
心を豊かにする子

「感得」と「発信」の往還を生む単元づくり

- 単元デザインの工夫
 - A 導入 主体的な学びにつなぐ
 - B 展開 対話的で深い学びにつなぐ
 - C 終末 確かな学びや発展につなぐ

「感得」と「発信」の往還を生む授業づくり

- 「感得」と「発信」の往還の中で育てる読解力・表現力
- 「感得」と「発信」の往還を生む授業づくり
 - ・ 読む力・感じる力・発信する力をつける手立て
 - ・ 「感得」と「発信」をつなぎ、深い学びにつなぐ手立て

情報活用能力を育成する場の工夫

- ・ 情報活用スキルを身に付けさせるための方法の開発（調べる・比べる・つなぐ）
- ・ 教科の特性に応じて活用可能なスキルの取得の場の設定

情報活用能力を発揮する場の工夫

- ・ 委員会活動の活性化
- ・ 課題に応じた適切な場の提供
- ・ 家庭・地域図書館との連携
- ・ 単元・授業とリンクさせた活用計画の策定と機会の保障

「感得」と「発信」の往還を生む授業の創造

基礎力を育てる取組

基礎力を育むサプリの開発

- 新聞サプリ・教科書サプリの充実・活性化

支持的風土のある学級・学校づくり